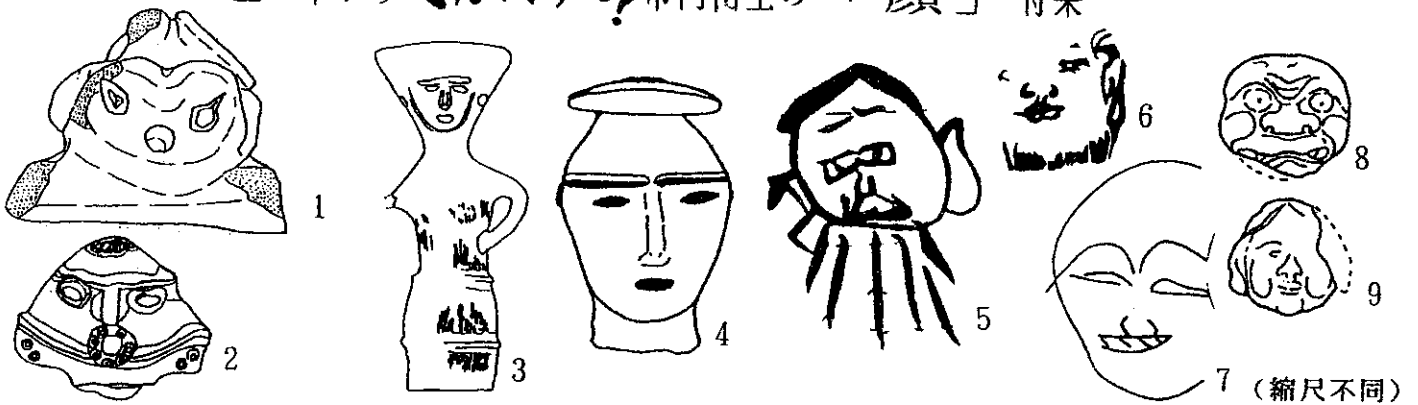


まい 埋やちよ

No. 3

千葉県八千代市
埋蔵文化財通信
1998. 10. 1
(平成10年)

土の中から こんにちば、市内出土の「顔」特集



遺跡から出土する遺物の中には、人や動物の顔を描いたりかたどったりしたのがあります。その意味については、いろいろな解釈がありますが、とりあえずこうして並べてみるとそれぞれ個性があって楽しいものです。

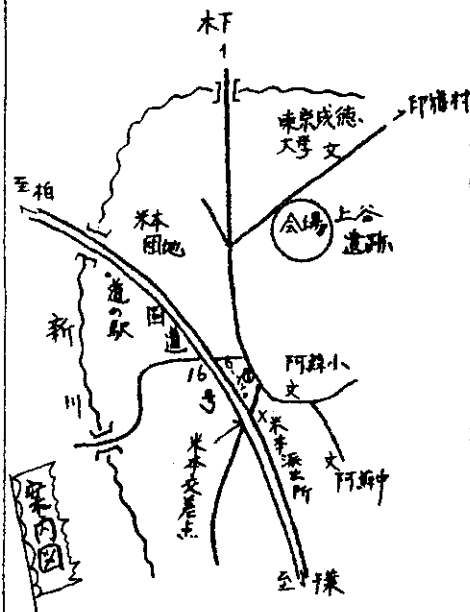
- 1 浅間内遺跡出土顔面把手（縄文時代）
2 佐山貝塚出土土偶（縄文）、3・4 桑納2号墳出土埴輪（古墳）、5 白幡前遺跡出土人面墨書（奈良）、6 上谷遺跡出土人面墨書（平安）、7 同人面刻書（平安）、8・9 沖塚遺跡出土泥面子（江戸）
(常松 成人)

♪♪♪♪
☆☆☆☆

情報発信

遺跡見学会のご案内

♪♪♪♪
☆☆☆☆



上図6・7の人面墨書土器・人面刻書土器が出土した上谷遺跡を公開します。「コ」の字状に並んだ掘立柱建物群を含む平安時代の大集落です。出土した遺物も展示します。

期日 平成10年11月29日(日)

受付 午後0時から午後2時30分まで

小雨決行。入場無料。駐車場はあります。送迎バスは運行しません。

詳しくは、八千代市教育委員会社会教育課文化財係
0474-83-1151(内線 6113)まで。

当日のお問い合わせ先は、0474-88-7392

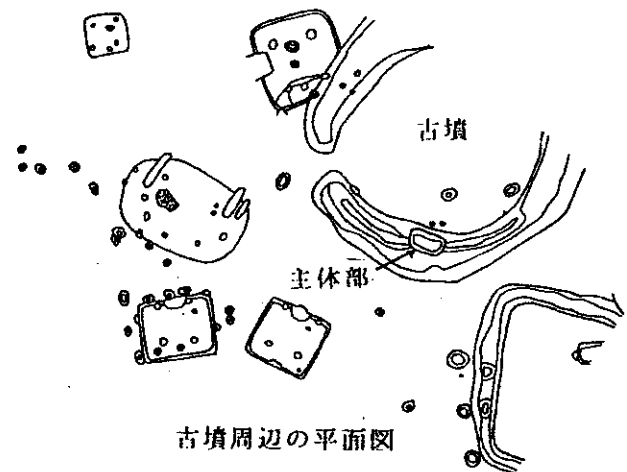
遺跡紹介 菅地の台古墳

平成10年1月、奈良県の黒塚(くろづか)古墳で多数の鏡が出土し、その鏡が邪馬台国(やまたいこく)の卑弥呼(ひみこ)が中国からもらった鏡かもしれないと、日本中が大騒ぎしていた頃(筆者もその見学会の行列に並んでいた一人でした)、八千代市では、誰にも注目されず、ひっそりと古墳の調査が行われていました。

その古墳は、萱田(かやた)の菅地の台(すげちのだい)遺跡で発見されました。普通、古墳というと大きな墳丘(ふんきゅう)があり、発掘する前から場所がわかることが多いのですが、今回は、集落跡を調査している時に偶然見つかりました。竪穴住居の跡である黒いしみを探していると、黒いしみは住居の形には成らず、黒い溝がぐるっと円を描くように検出されたのでした。その規模から考えてこの溝は、古墳の周囲を巡っている周溝の跡だとわかったのです。元々は墳丘も存在したのですが、長い年月の間に、削られてしまったのでしょう。

以下、菅地の台遺跡で発見された古墳について簡単に説明してみましよう。まず、大きさですが、溝の外側から外側で約18mあり、内側と内側で約12mありました。溝は、幅が約3mで、深さが約60cmの断面が船底形のものでした。古墳の形は溝の巡り方から、直径12m以内の円墳(えんぷん)と考えられますが、一部溝が途切れる部分もありました。また古墳で気にかかるのは柩(ひつぎ)を納めた場所(主体部と呼んでいます)です。

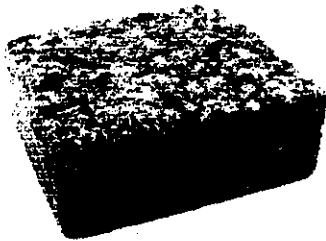
主体部は溝の底から検出されました。約2.5m×1.5mの長方形で深さが約50cmの穴でした。その穴の上から古墳時代中期(5世紀くらい)の土器が出土しました。副葬品は、残念ながら出土しませんでした。ただ、本当は、失われた墳丘の中に副葬品がたくさん入った主体部があったのかも知れません。



今回、古墳を発見した菅地の台遺跡は弥生時代～平安時代の集落跡を中心とする遺跡ですが、古墳のすぐ隣では弥生時代の墓である方形周溝墓も検出されていますし、また過去においては墳丘のある古墳も調査されています。このことから菅地の台遺跡では、弥生時代の昔から、時には集落として、時には墓地として、人々が様々に利用していたことがうかがわれます。今回発見した古墳は、奈良の黒塚古墳に比べれば、規模も副葬品のレベルも格段の差がありますが、こうした注目されない遺跡も地道に調査を続けることによって、やがては、地域の歴史を解きあかすことにつながるのだと思います。(宮澤 久史)

遺物紹介 温石(おんじゃく)

発掘調査をしていると、用途不明の遺物が出土することがよくあります。下の写真は市内保品(ほしな)の上谷(かみや)遺跡から出土した石製品です。縦12.2cm、横10.8cm、高さ(厚さ)4.8cm、重さ1.4kgの立方体で、各面は平らに磨き上げられており、各辺は面取りされています。非常に丁寧に作られており、石質はおそらく蛇紋岩(じゃもんがん)系の石と思われます。平安時代の住居跡の床面から出土しました。



上谷遺跡出土の温石

当初は全くその用途がわからず、砥石だの文鎮だの漬物石だのはたまた道路の歩道に敷いたブロックだのと調査補助員達と話していました。しかし、数カ月後また別の平安時代の住居跡の床面から、全く同じ形をした石製品が出土したのです。大きさは縦11.7cm、横9.7cm、高さ(厚さ)4.5cm、重さ1.2kgと、先に出土したものよりやや小さいのですが、特

徴や石質は全く同じです。

さてその用途ですが、いろいろと調べていくうちに古代の医療具である「温石(おんじゃく)」であることがわかりました。使い方は、直接火で熱したり、熱湯に入れたりして温め、布などに包んで患部を暖めたようです。腰痛などの温熱療法に用いたのかもしれませんが。ところで皆さんは、布に包んで身体を暖めるといって何か頭に思い浮かぶものはありますか。そうですカイロです。江戸時代には切り餅状に小さくした温石が携帯用暖房具として、布などに包んで懐中に入れ、身体を暖めるのに用いられていたようです。現在のカイロと言えば使い捨てカイロが一般的ですが、形態は異なるものの、同じ身体を暖める用途を持つ道具として、温石は使い捨てカイロの先祖にあたるといえます。

平安時代の温石は、上谷遺跡のほかに市内では、萱田の白幡前(しらはたまえ)遺跡で1点出土していますが、千葉県内での出土例は非常に少ないようです。現在、カイロは誰でも簡単に入手することができます。しかし、平安時代の当時は病気を治す貴重な医療具の一つであったようです。(武藤 健一)



【訂正のお知らせ】

1号 page-3「墨書土器」中の「堂」とした墨書は、国立歴史民俗博物館平川南教授から、「小黑」であると教えていただきました。「小黑」は人名と思われます。

2号 page-4「古代のベルトの飾りの話」中の「鍔帯(かたい)」は「鍔帯」の誤りでした。以上、訂正してお詫びいたします。

遺物紹介 ヲイノ作南遺跡の魚骨圧痕土器

平成8年8月から12月にかけて調査の行われた八千代緑ヶ丘駅付近のヲイノ作南遺跡からは、不思議な圧痕の残る縄文土器片が出土しています。



土器の拓本
縮尺2分の1 (○の中に圧痕があります)

この土器は、縄文時代前期（今から約6000～5000年前）の黒浜（くろはま）式土器と呼ばれる深鉢形土器の底の一部で、圧痕はその外面にはっきりと残っていました。見つけた当初は、いったい何の圧痕かと首をひねるばかりで、おそらくは昆虫のものであろうなどと考えていました。しかしそんな矢先、加曾利貝塚博物館の村田六郎太先生や千葉県立中央博物館の小宮孟先生にお会いする機会を得たので、伺ってみたところ、実は魚骨であることがわかりました。しかもニシン科の魚類のものであろうということまで教えていただきました。

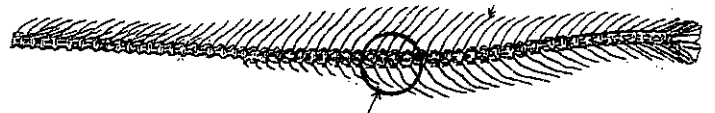
ニシン科にはニシン・イワシ・マイワシ・カタクチイワシ・コノシロなど多く

の魚種が含まれるそうです。いずれも海に生息していますが、淡水域で産卵する湖沼ニシンの可能性もあります。

また圧痕の長さから推定される全長は15～20cmほどで、対象となった骨の部分は、腹椎骨（ふくついこつ）から尾椎骨（びついこつ）にかけての移行部分といえることができるそうです。



マイワシ



マイワシの骨（圧痕は○のあたりか）

では当時の自然環境について考えてみますと、黒浜式土器が使用されていた時期は、折しも海岸線が最も内陸に入り込んでいた頃であり、市内でも宮内橋付近まで海が来ていたと考えられています。したがって本遺跡からも直接海産物が入手しやすい状況にあったわけです。市域にあった「海」の恵みがこんなかたちで残っているのだとしたら、実に感動的ではありませんか。（玉井 庸弘）

編集後記

やや不完全燃焼気味の夏が終わり、秋がやって来ました。空気が涼やかとなり、発掘現場も過ごしやすくなりました。

芸術の秋、文化祭の秋、文化財の秋。美しい季節をめながら、今日も現場へ向かいます。

埋(まい)やちよ

—千葉県八千代市埋蔵文化財通信—
No.3 平成10年10月1日発行

編集・発行 八千代市教育委員会 生涯学習部
社会教育課 文化財係

八千代市大和田138-2

☎276-0045 ☎0474(83)1151 (代表)